

滋賀の文化情報誌
デュエット
Duet

2014 夏 vol.113

特集

ぎょまいのさと
魚米之郷

—太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし—

新撰 淡海木間撰 57 **木造狛犬**

INFORMATION STATION **催し案内 2014夏**

MYBOOK **自費出版物の紹介**

SUNRISE BOOK PRESS **サンライズ出版の新刊案内**



特集

ぎょまいのさと

魚米之郷

—太湖・洞庭湖と琵琶湖の水辺の暮らし—

上海の西方、長江（揚子江）南岸の江南地方は「魚米之郷」とも称され、水路に囲まれた農地と湖沼から豊かな農産物と水産物の恵みを得ています。

その中心に位置する太湖、さらに長江中流の洞庭湖、そして日本の琵琶湖における水辺の暮らしを紹介する企画展示「魚米之郷」が、滋賀県立琵琶湖博物館で開催されています。

担当学芸員の楊平さんに、同展の見どころなどをお聞きました。

■滋賀県立琵琶湖博物館

住所 草津市下物町1091

連絡先 TEL 077 (568) 4811 FAX 077 (568) 4850

観覧料 企画展示：小・中学生100円、高・大学生160円、一般200円
常設展示：小・中学生 無料、高・大学生400円、一般750円

アクセス JR 草津駅西口から近江鉄道バス「からすま半島」行きで「琵琶湖博物館前」下車／名神栗東ICから車で約25分

取材／編集部 写真／辻村耕司



第3部「魚と湖」展示
太湖周辺でみられる家船の原寸大模型

企画展示期間：7月19日(土)～11月24日(月)



第1部「湖と暮らし」展示。赤い敷物の上に広げられた巻物がインタビュー中に登場する「清明上河図」

中国語にも「母親湖」といって、「マザーレイク」と同じような言葉があります。

滋賀県立琵琶湖博物館学芸員 楊 平さん

楊さんご自身は、中国でも北の方の生まれなんです。

はい、東北部の遼寧省です。やや寒いところですよ。

——どういった経緯で日本へいらっしゃったんですか。

高校卒業後、大学の日本語学科に入学して、日本人の先生や学生といっしょに学ぶ中で、日本の伝統文化、着物や踊り、町並みなどに興味を持ちました。日本を実際に見てみよう、その後、高知大学に学部生として入りました。2年生で文学部の社会学系の方へ進みました。

そして、夏休みに中国の江蘇省、今回の企画展でも取り上げている太湖の近くへ旅行しました。調査ではありませんでしたが、その頃、きれいな水や環境問題に興味をもつようになっていて、どこか湖の近くに行きたいと思って、選んだのが太湖でした。行ってみたら、いろいろと調べてみたいと思うようになりました。昔の水路が残る町並みなどの文化的な面にも興味を持ちました。

——お生まれになった遼寧省は海に面した都市部ですから、同じ中国といっても全然違うのでは。

そうですね。東北部は水が少ない地域ですが、江南地方は家のドアを開けると、すぐ水路や川があつてという感じ。「出門見水、以船代步」（家を出ると水が見える、船が歩きの代わり）と昔からいわれており、気候も景色も雰囲気もかなり違います。

——その後、筑波大学の大学院へ行かれたのは、どういうきっかけで。

高知大学では環境経済や環境政策の分野を学んだのですが、別の方法がないかなと思ひ、当時、筑波大学におられた環境社会民俗学の鳥越皓トリノスヒロキ先生の研究室で学びたいと考えていました。

——以前は琵琶湖博物館におられた嘉田由紀子さんとも何冊か共著のある方ですね。

生活分析から環境を見てみようという立場だったんです。私は、学部生のときに先生の本を読んだことがあり、研究室で勉強をさせてもらいたいということことで筑波大

プロフィール

よう・へい（ヤン・ピン）／1975年、中国遼寧省生まれ。筑波大学大学院人文社会科学研究所博士後期課程修了。2007年9月より滋賀県立琵琶湖博物館に勤務。環境社会学専攻博士（社会学）。



学の大学院を受験しました。

——そして、2007年に琵琶湖博物館に來られて、その後、国内外のさまざまな分野の研究者が集まった「東アジア内海の新石器化と現代化・景観の形成史」という研究プロジェクトに参加しておられますね。

はい。総合地球環境学研究所のプロジェクトで、東アジアの景観と環境の変化をテーマとしています。私はやはり中国の太湖を対象としたのですが、沖縄や韓国などが専門の研究者や、何千年、何万年の単位で考えておられる考古学の研究者の方がおられて、たいへん刺激を受けました。

例えば、楨林啓介さんという研究者は長江下流域の遺跡から見つかった水田跡を調査し、最初期の稲作と水田の姿を明らかにしようとしています。企画展に先だって3月22日に琵琶湖博物館で開催した講演会「魚米之郷を語る」でも、講演していただ



きました。

その講演は行きました。これまで稲作の起源地というと雲南地方とされていましたが、最近では長江の中・下流域とする説が有力になっているそうですね。湿地帯を利用した原初的な水田跡からはコイ科の魚の骨も大量に見つかる、もともと野生のイネが生えていた湿地は魚の産卵場所でもあったという興味深いお話でした。

そうなんです。長江や太湖周辺の遺跡から最も古い炭化米などが発見され、それが起源ではないかというふうにいわれてきているんです。私がやっている社会学という分野でも、人々の暮らしが歴史の中でどのような変化を経て現代の姿にたどりついたのか、そうしたバックグラウンドも考える必要があります。

——他にプロジェクトの研究者の方から刺激を受けた面はありましたか。

環境工学の研究者である朱偉先生（中国・河南大学）にも刺激を受けました。現在の中国の湖の水をきれいにするためには、環

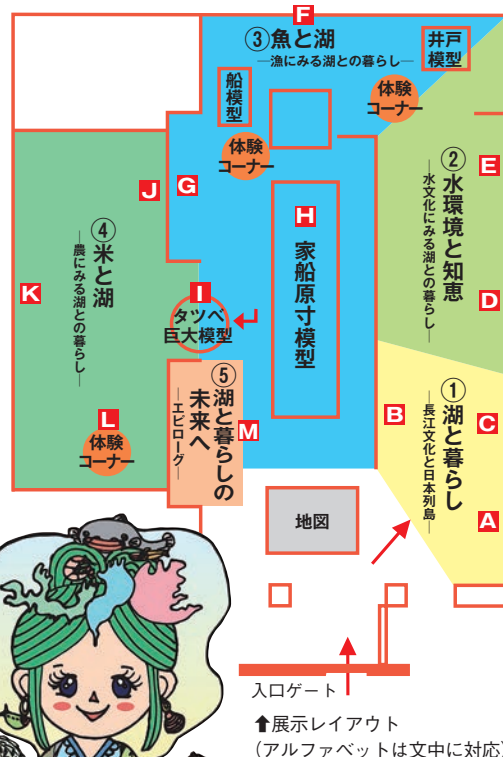
第1部 湖と暮らし ―長江文化と日本列島―

——それでは、今回の展示を順に回りながら解説していただけますか。

最初の展示Aでは、太湖・洞庭湖と琵琶湖の歴史とそれぞれのつながりが紹介されています。

まず、湖そのものを比較すると、面積は琵琶湖（670 km²）に対して、太湖（2250 km²）や洞庭湖（2740 km²）は3倍以上ありますが、大きさのわりに平均水深が太湖で約2mと浅いという特徴があります。水の流れも早くありません。

——ですから、湖の成り立ちから見ると、長江の下流で形成されたラグーン（潟湖）である太湖は、長江中流で水量



◀今回の企画展示のイメージキャラクター「愛湖ちゃん」

境工学の手法の方が、結果につながるのが早いんですね。科学技術なしには解決しきれない問題をいっぱい抱えていますから。

ただ、工学は工学でそれを活かすための課題がたくさんある。そうすると、文系と理系が協力していく、意見交換も非常に大事だと思います。

第2部 水環境と知恵 ―水文化にみる湖との暮らし―

調節の役目を果たしている洞庭湖は宇治川の南にあった巨椋池に似ていますよね。スケールがケタ違いですが。

そうですね。だから、太湖や洞庭湖のまわりには湿地帯や小さな湖がたくさん点在しています。

向かい側の展示Bでは日中の文化的な関わりとして、洞庭湖周辺の水郷風景を描いた瀟湘八景と、それをもとに日本で考案された近江八景をパネルで展示しています。

——次の展示Dの模型は、太湖周辺の水郷地帯のものですね。

——次に、長い絵巻Cが展示されています。これは、「清明上河図」といって、華北の北京と江南の杭州を結んだ京杭大運河の周辺の繁栄する姿を描いたものです。オリジナルは国宝級の文化財で、展示しているのは中国の出版社が製作した印刷物です。

——運河を進む船や通りの商店、通行人などがとても精密に描写されていて、この絵を眺めているだけでも半日過こせそうです。

隋の時代（7世紀）に完成した延長2500 kmの京杭大運河によって、江南地方で生産された食糧が政治の中心地である華北へ輸送されるようになりました。「蘇湖熟すれば、天下足る」（長江下流域が豊作であれば、中国全土が飢えることはない）という言葉があります。現在も太湖や洞庭湖周辺が豊かな食糧生産地であることは変わっていません。

——黒い屋根と白い壁、そして水路と橋がこの地方の街の特徴です。いまも車道ではな



◀江南地方の水郷の風景
(撮影／楊平)

↓住居とそこから水路へ続く階段、
水上の船の模型



く、水路がすべてという感じで、水が流れる水路がないことには生活がなりたないのです。もちろん水道も通ってはいませんが、まだまだ水路で洗濯をしたりもします。洗剤は使わずに。

町並みと水路の模型の中に置かれた船には、鵜飼^{うい}いのウがのっています。こういう小型の船は中で暮らしているわけではなく、漁に出たり、移動するための船です。

水郷地帯は観光地としても非常に人気があります。ウを使った魚捕りも、日本と同じように観光資源になっています。展示写真に写っている船のうち、赤い提灯がのっているのは観光用の船ですね。

第3部 魚と湖

漁にみる湖との暮らし

つづく展示^Eでは、水環境として川端^{かばた}を紹介しています。高島市針江^{はりえ}の集落をモデルに模型もつくりました。中国式の川端もあるので、水との暮らしについて比較してみてもえればと思います。細かな違い

ここ^Fでは漁業で用いられている漁具と捕れた魚介類の料理を紹介しています。太湖や洞庭湖でエビを捕る漁具、浅い水辺や田んぼの中や水路でタウナギを捕る漁具など、さまざまな伝統的な漁具が並んでいます。多くの漁具は、太湖、洞庭湖、琵琶湖でよく似ています。中国の場合、漁具の素材が化学繊維などに変わってしまったので、琵琶湖の方が昔の古い形を残しているものもあります。

タツベ、モンドリなどの漁具や定置網



↑太湖と生きる漁師 (撮影／楊平)

いはありますが、人々の生活、文化というのが非常に似ているんだと感じていただければうれしいです。

中国の石組みの洗い場は、滋賀県では能登川^{のとがわ}地域の水路にあった階段式のものに似ていますね。それらの多くは、昭和30年代以降の自動車の普及とともに埋め立てられて道路になったわけですが。

のエリは、日本にいつごろ伝わったのか。稲作といっしょに來たのでしょうか。それが、これまでの研究では不明なんです。米づくりほどは古くはないようです。それほど古い遺跡からは出土していません。

つづいて、それぞれの地域の伝統料理が展示^Gされています。中国では、海の魚よりも淡水魚の消費量が多いのだそうですね。じつは、今日のために調べるまで上海ガニは淡水のカニだということも知らなかったのですが。

上海ガニ(チュウゴクモクズガニ)は、太湖の東にある淡水湖、陽澄湖^{ようせうこ}で養殖されているものが最高級品とされています。上海ガニのサンプルも展示しています。最初にできあがってきたものは、一応カニには見えるんですが、生物系の学芸員から「これでは別のカニだ」という指摘があった作り直してもらいました(笑)。

展示写真は、江南地方の飲茶^{やんチャ}の料理で、休憩時間などにみんなで楽しむものです。魚の形をしているのは、お餅のような感じ。緑色の葉で包んだのは、豚肉と粘り気のあるお米のオコワが入っているチマキです。この展示は、女性や小さなお子さんも興味があるかと思えます。

どれもおいしそうです。料理の見た目は、琵琶湖は地味な印象で、似ていません。

ね。中国の魚料理は、蒸したり焼いたりしたものが主体で、フナずしのような発酵食品の文化は太湖周辺にはないようです。別のルートで伝わったということでしょうか。そして、展示室の中央には大きな船が展示[※]されています。

「家船」の原寸模型です。最も湖に近いところで暮らしている彼らの生活を、できるだけリアルに、具体的で紹介する展示をめました。船尾の方が生活スペースで、食事の煮炊きをする道具もあります。船室の屋根の上は涼しいので、夏にはここで寝ころんでお休みしたりします。そして、船首の方は漁をするためのスペースです。

「家船」というのは日本の民俗学で用いられてきた言葉ですが、こうした船を居住空間にしている人々が太湖周辺に5万人ほどいるといわれています。現在は陸地に土地も持っていて兼業農家のようになっている人々もいますが、本来は漁業を生業としていて、朝起きてから寝るまで生活のほと



↑展示パネルの前で食文化について説明する楊さん



↑太湖周辺で暮らす漁民たち（撮影/楊平）

んどを水上で過ごす人々でした。飲み水も湖から取るし、洗濯もする。日常用具の多くは手作りですし、例えば、ご飯をつくる場合、カマドで火を起こす燃料が必要ですね。そのため、水辺のヨシの手入れや刈り取りなどをして、それを燃料にします。

家船に暮らす人々は、太湖に特徴的なのですか。

太湖だけではありません。洞庭湖にも昔はいました。あとは、長江にも住んでいました。香港の近くにも同じように船で暮らす人たちがいました。

琵琶湖でも、そういう例はあったのですか。

琵琶湖の場合、さまざまな物資を積んで菅浦や大津などの港を行き来した丸子船で

第4部 米と湖 農にみる湖との暮らし

そして、次の区画へ向かう通路には、何か置いてあります。



巨大なツベ¹です。魚の気分で入ってください。



→「上」フナの一種 「下」ギギに似た魚（撮影/藤岡康弘）

は、一時的に寝泊まりをしていたそうです。太湖の家船は、動力はついていないのですか。

ついていません。かつては帆で走りまわりました。大きな帆柱が6本ぐらい立っていて、漁師さんたちは風向きを読んで、今日どこへ行って、どんな漁をするかを決めます。彼らは、この船とは別に、あちこち移動するための小さい船もいくつか持っています。

家船で魚を捕ったら、どこか市場みたいなところに持っていくのですか？

そうです。魚市場へ持っていく場合もありますし、朝一番に漁に出た家船が帰ってくる8〜9時ごろに、定期的に買いにくる業者もいるんです。彼らが町へ売りに持っていくたり、あるいは家船で暮らす人々は農家と密接な結びつきがあるので、米と魚を交換したり、売買されるルートはいろいろあります。

本当は出られなくなるのですが、反対側に抜けられるようになっていました。

次の区画では、それぞれの湖周辺の農業を紹介しています。

まず、最古の稲作遺跡ではないかといわれている7000年ぐらい前の水田跡や集落跡²を紹介しています。その向かい側は、

太湖周辺の水田農業の解説です。農具の模型を置きましたが、これも琵琶湖周辺で使われていた農具と非常に似ていています。

——あれは、唐寅^{とうゐん}ですね。名前のとおり中国から伝わったので、日本と同じ形です。その奥はなんですか？

水を高いところへくみ上げる竜骨車^{りゅうこつしゃ}で、これも日本の農村でも普及しました。

こちらの壁面^{かめん}Kは、太湖の近くで行われている養魚（淡水魚の養殖）を紹介しています。2種類のやり方があり、一つ目は太湖の北側の江蘇省^{こうそく}で行われているやり方です**パネル1**。真ん中に水面が見えるのが養魚池で、手前にヒシの池があります。それとは別にハスの池があります。そして、イネが生えている田んぼがあります。まず、小さな稚魚^{ちぎょ}をヒシの池で飼います。ヒシの葉っぱが稚魚のエサになります。育ったら、大きな養魚池に移します。季節が夏になったら、日よけの効果があるハスの池に移します。ハスの葉っぱが影をつくり水温が低く保たれています。

こうした魚の移動と別に、水も移動させます。田んぼの用水はこっちの養魚池から持ってこれるように細い水路がつつてあ



↑ **パネル1** 太湖の北側の江蘇省の養魚

↓ **パネル2** 太湖の南側の浙江省の養魚

ります。つながっているもので、田んぼの中に稚魚が入ってくることもあります。これは「複合的養魚」と呼ばれます。

もう一つのやり方は太湖の南側の浙江省^{せいしゅう}で行われているもので**パネル2**、そのまま田んぼの中に魚を放しています。ですから、この田んぼは無農薬で、年中、水が張られています。

——乾田にしないのですね。浙江省側は山間地^{さんかんとち}なのでしょうが、棚田^{てん}になっています。

そうです。地元では、この棚田の近くにある川から自然に魚が田んぼに入ってきて始まったと伝わっています。1000年以上の歴史がある水田養魚として、FAO（国際連合食糧農業機関）によって世界農業遺産に認定されています。日本でも石川県の「里山里海」などいくつか認定されていますね。

——赤い魚ですが、コイですか？

はい、コイの一種で、「田魚」と呼ばれています。観賞用ではなくて食用です。中国では赤はおめでたい色なので、高級食材とされています。

——その次のパネルは琵琶湖の農業、一般的な日本の米づくりで、その次に洞庭湖の



↓ **パネル3** 洞庭湖の近くの農業

農業が紹介されています。

洞庭湖の農業**パネル3**は、水位変動が激しいので、それに合わせて農作業を行うという特徴があります。一部では、いまでも機械化されておらず牛を使っています。田の畦^せにいろいろな野菜を栽培しています。田んぼの水路では、タウナギを捕ります。——ニワトリもいたりして、日本人が見ると懐かしい風景ですね。

江南地方は、米と魚以外に養蚕もたいへん盛んな地域です。昔は、カイコの蛹^{まご}や糞を魚のエサにして循環させていましたが、今は変わってきています。

——その向かいには中国の民族衣装^{みんぞくいさて}と等身大のイメージキャラクターがあります。

お子さんだけですが、中国の民族衣装に着替えてもらって、今回の企画展のキャラクター・愛湖ちゃん^{あいこちゃん}といっしょに写真を撮ってもらえるようになっていきます。愛湖ちゃんは、子供たちに少しでも湖に関心をもってもらいたくて私が考えました（笑）。

——どうしても、竹生島の弁天様を思い出してしまのですが……。

中国でも、弁天様は水の神様ですが、弁天様ではありません（笑）。



第5部 湖と暮らしの未来へ ―エピソード―

8

そして、最後のコーナーMです。昨年は、滋賀県と湖南省が友好提携を結んで30周年でした。湖南省から訪問団を迎えて琵琶湖上のピアンカなどで記念式典が行われたほか、水質保全技術に関する交流の覚書が交わされました。その際、滋賀県に寄贈された壺などを展示し、琵琶湖博物館と湖南省博物館の協力関係などについても紹介しています。

中国は、いま経済発展が進むなかで、特に太湖周辺では工業化や都市化が進み、水質の悪化が問題になっているそうですね。

そうした変化に対して、中国であろうと、日本の琵琶湖周辺であろうと、人々が感じることは共通しています。みんな、きれいなものをきれいだと思っていて、子供の頃から親しんできた風景を残したい、水もこれ以上汚してはいけない、生き物や緑も残したいという感覚は同じだと思います。

滋賀県のキャッチコピーに用いられたことから、琵琶湖を「マザーレイク」と呼ぶことがあります。中国語にも「母親湖」という同じような言葉があります。やっぱ「母なる湖」という意味なんです。

水辺というのは生あるものを生み出す場として、考えられてきたのでしょうか。その点は水田も同じです。

そうですね。先ほど展示を紹介したように、江南地方の水田では、昔から魚とイネがいつしよに生きるような環境ができていたのです。けれども、時間がたつて環境が変わっていくにつれて、そうしたやり方は一般的ではなくなろうとしています。何千年という歴史、伝統があるのに、いったん消え去ると、もう一度取り戻すのはたいへんな時間と労力が必要になります。

これは滋賀県、琵琶湖の周辺でもいえることで、いま、琵琶湖周辺の田んぼを使って、「魚のゆりかご水田プロジェクト」という取り組みがあります。人と生物、あるいは湖との関係を取り戻そうという試みです。魚が産卵のためにのぼれるよう水田の水路に魚道をつくっているわけですが、実

際、何を取り戻すのかといえば、人と環境の距離なんですね。水路をさかのぼる魚を日常的に目にする。子どもが、田んぼに入って魚をつかむ。ある時期から失われた、そうした関係を取り戻す取り組みになっています。

こうした環境との距離感は、ほっておくと維持されないものだろうと思います。琵琶湖の周りと同様、太湖の周辺でも時代とともに暮らしの環境も変化し、水路や水との関わりが薄れていっています。

滋賀県でも、琵琶湖が生活とは切り離されている感じがあります。

例えば私が高知に住んでいたときは、「ウツボのたたき」といって、ウツボの身にちよつと火を通した半生っぽいのを食べてました。あれも、高知でなければ、へびみたいで、顔も怖いし、わざわざ食べようとはしないですよ。地元産の普通の食べ物として出てくるから、子供の頃から何の疑問も持たずに食べて、実際おいしいという記憶が残る。だんだん、そういう状況がなくなってきたように思います。人との接し方でも、実際に会って話すと、ネットで読んだ情報やメールのやり取りだけです。すますのとは違います。湖や水田などとのつき合い方も、実際に触れるよりも、情報が先に来ちゃってしまっているように思います。

今回の企画展を担当させて、どんな

↓ 6月21日、野洲市須原の「魚のゆりかご水田」観察会では、参加者が多くのフナやコイ、ナマズを捕まえた（撮影／辻村耕司）



点が難しかったですか。

湖と暮らし人々の「知恵」をどう表現するかという点ですね。

社会学という分野で、湖との暮らしを展示して、来館者にわかるように表現するということは非常に難しいと実感しました。魚や昆虫の展示なら、活動範囲が限定されているので、模式図にすることもできますが、人間の暮らしというのは、多方面に広がっている、ある意味で目に見えないものなので、その辺をどう表現するか。どうやって伝えればよいのか悩みました。

しかも、伝えたいのは固定された生活様式ではなく、昔に比べて湖がこんなに変わった、それにつれて人々の暮らしも変わってきているという側面なので、正直、まだうまく伝えられていない部分があり、今後の課題として進めていきたいと思っています。

準備中に印象に残っていることはございますか。

昨日、家船が壁に寄りすぎているというので、職員全員に集まってもらって動かしただんです。手をかける部分がなくて、人力で持ち上がるとは思えなかったのですが、力を合わせることの重みを実感した瞬間でした（笑）。また、地元の多くの方々のお力をお借りして企画展示の開催ができました。心から感謝しております。

本日は準備中のお時間をさいいただき、ありがとうございます。

（2014.6.22／7.12）

木造狛犬

MIHO MUSEUM
高梨純次

神社の参道や社殿の前、左右に分かれて、にらみつけるように険しい表情で座っているのが狛犬、ということ、多くの方がご存知でしょう。神様をお守りする守護獣ということは、座っている場所や表情からもわかります。現在まつられている一般的な狛犬は、口を明けて咆哮する阿形像は獅子、口を閉じてにらみつける吡形像には頭上に角がある一角獣として狛犬、というように、獅子と狛犬が一对として配置されている例が多いのです。「獅子・狛犬」と、いちいち繰り返すこともわずらわしいということでしょうか、単に「狛犬」と呼んでいます（ここでも慣例に従って「狛犬」と呼びます）。

そもそも、獅子は基本的に、百獣の王ライオンに起源するとすれば、日本列島にライオンがいたわけではありませんが、これは、西方から伝来したものということになります。獅子が一对として祀られる事例は、インドや中国にありますから、その風習が渡来したものであると想像がつかます。しかし、そのうちの1体が、一角獣として祀られる事例は、平安時代にみられるようですが、果たして日本で生み出された形式なのかどうか、今回 MIHO MUSEUM の秋期展「獅子と狛犬」（10ページ参照）の論点の一つとなるでしょう。

滋賀県には、あまり知られてはいませんが、優れた狛犬像が伝えられています。全国的にみても、鎌倉時代を代表する狛犬として、この大宝神社に伝えられ、重要文化財に指定される像は秀逸です。細身で筋肉質の精悍な姿は、すべての魔を追い払い、神と神域を守護するにふさわしい形で、造形作品としての完成度も抜群で、優れた作者、おそらく仏像や神

像を作っていた仏師のなかでも、高い技量の手になったものと思われます。大宝神社が鎮座する地には、鎌倉時代には延暦寺の庄園や、有力な門跡である青蓮院に關わる寺領などが確認されていますから、やはりこの優れた狛犬の造像には、延暦寺が呼び込む、高い技量の作者の洗練度がみてとれます。また、阿形の金箔、吡形の銀箔という色分けも、見所の一つでしょう。



栗東市綾・大宝神社
2 軀 木造・彩色
像高：阿形 47.3cm
吡形 46.7cm
重要文化財 鎌倉時代



なく、迎え討った中国地方(摂津・播磨・備中など)の武将の視点からもこの戦いを描き出します。



竹田城跡

入館料: 大人400円、小中学生200円

休館日: 開催期間中は無休

お問い合わせ先: TEL 0749 (63) 4611

■関連講座

「秀吉の中国攻め～鳥取城攻めを中心に～」
8月24日(日) 午後1時30分～

講師: 岡村吉彦氏(鳥取県立文書館県史編纂室室長)

会場: 勤労者福祉会館「臨湖」(長浜市港町4-9)

受講料: 500円(事前申込不要)

お問い合わせ先: TEL 0749 (65) 2120

獅子と狛犬

— 神獣が来たはるかな道 —

9月2日(火)～12月14日(日)

MIHO MUSEUM

神社の鳥居の先でまず迎えてくれる一対の獅子と狛犬の像。日本の特色ある獅子と狛犬像を紹介するとともに、エジプト、西アジア、中央アジア、中国などの獅子や角を持つ神獣を展示し、世界的な視野から、彼らの来たはるかな道をたどります。



石造獅子(岡山県・熊野神社)

入館料: 大人1100円、高大生800円、小中学生300円

休館日: 月曜日(祝日の場合は開館)

お問い合わせ先: TEL 0748 (82) 3411

全国街道資料ネットワーク展 にっぽん歴史街道 近江の街道を描いた浮世絵

開催中～8月31日(日)

草津宿街道交流館

近江の東海道、中山道を描いた浮世絵を展示。「街道」をテーマに複数の博物館が一斉に展示を行います。共催館(埼玉県立歴史と民俗の博物館・郵政博物館・物流博物館ほか)は、関東の施設ですが、ご興味のある方はぜひ足をお運びください。

休館日: 月曜日

入館料: 大人200円、高大生150円、小中学生100円

お問い合わせ先: 077 (567) 0030

パズル遊びへご招待

開催中～9月2日(火)

世界風博物館 東近江大風会館

お子さんが夢中になるさまざまなパズルと不思議なトリックアートを展示します。

休館日: 水曜日、8月26日(火)

入館料: 一般300円、小中学生150円

お問い合わせ先: TEL 077 (521) 2100

結びの文化

— 花むすびとローブ術 —

開催中～9月7日(日)

愛荘町立歴史文化博物館

茶道文化とともに継承された「花むすび」、船乗りには欠かせない技能として伝授された「ローブ術」、美と実用の両面から結びの文化を紹介し。

休館日: 月・火曜日

入館料: 大人300円、小中学生150円

お問い合わせ先: TEL 0749 (37) 4500



秀吉に備えよ!!

— 続・羽柴秀吉の中国攻め —

開催中～9月8日(月)

長浜市長浜城歴史博物館

羽柴秀吉の前半生にスポットを当てた特別企画「羽柴秀吉天下統一への足跡」の一環であるテーマ展で、攻めた秀吉だけで

びわ湖のふるさと「ヨシ原」

— ヨシ原を利用するいきものたち —

開催中～8月31日(日)

滋賀県立琵琶湖博物館



カヤネズミ

ニゴロブナ

琵琶湖やその周辺にすむ生き物にとって、産卵や子育てなど繁殖の場として重要な役割を果たしているヨシ原で見られる生き物、ふなずしの原料として知られているニゴロブナの稚魚や、ヨシ原をすみかとしているカヤネズミなど約15種を展示します。

観覧料: 常設展示観覧券(一般750円、高大生400円、小中学生無料)でご覧いただけます。

休館日: 月曜日(月曜が休日の場合は開館)

お問い合わせ先: TEL 077 (568) 4811

湖底遺跡が語る 湖国二万年の歴史

開催中～8月31日(日)

滋賀県立安土城考古博物館

琵琶湖には100カ所を超える湖底遺跡が存在します。昭和48年から行われた琵琶湖開発事業関連遺跡の発掘調査では、多くの湖底遺跡を調査し、日本史を塗り替えるような発見も数多く得られました。

約40年にわたる調査成果を包括的に紹介します。

休館日: 8月は無休

入館料: 大人500円、高大生300円、小中学生無料

■企画展講座

「港・城・祈り—古代—中世—」

8月23日(土) 午後1時30分～3時

講師: 水野章二氏(滋賀県立大学教授)

「自然災害と再生の足跡」

8月30日(土) 午後1時30分～3時

講師: 寒川旭氏(産業技術総合研究所)

定員: 140名 **参加費:** 無料

お問い合わせ先: TEL 0748 (46) 2424



時代劇文化の発信地・京都

大石学・時代考証学会 編

A 5判並製本 総272頁 2500円＋税

時代劇に未来はあるのか？ 多くの撮影所が並び立ち「東洋のハリウッド」と呼ばれた京都太秦。この地で育まれた時代劇文化の継承とさまざまなアーカイブズの保存・活用をめぐる課題が、産官学の現場から率直に語られたフォーラムの記録集。



独白新選組

隊士たちのつづやき

松本匡代 著

四六判並製本 総264頁 1200円＋税

幕末の動乱の中、新選組隊士たちが結んだ絆とは？ 土方歳三、斎藤一、沖田総司、藤堂平助、山南敬助らが自らの心の内を仲間に語りかける人気のツイッター小説、待望の書籍化！ 既刊『新選組 試衛館の青春』に続く感動の幕末青春ノベル。

My Book

自費出版物の紹介



歌仙絵の彼方に

小説・侍大将遠藤喜右衛門

書店で発売中

木村光伸 著

四六判上製本 総224頁 1600円＋税

多賀大社所蔵の県指定有形文化財「紙本著色三十六歌仙絵」は、浅井長政の侍大将、遠藤喜右衛門直経が寄進したもの。歌仙絵に込められた武将の心情を、多賀大社宮司である著者の筆がすくい上げる。(2014. 3. 1刊)



万葉の径

深田弥行 著

四六判上製本 総347頁 非売品

問合先 大津市錦織二丁目2-10 (著者)

新制中学が市町村単位で設置された昭和23年に滋賀師範卒の新任教諭となり、変化の激しい世相の中で生徒指導に奔走、退職後は市と県の教育・福祉関係の要職を歴任してきた著者による折々の記録。(2014. 4. 10刊)

書店で発売中

歌集 火宅のごとし

和歌山利三 著

四六判上製本 総236頁 1800円＋税

大空に「飛来禁止」と叫ばんかうイルス防ぐ術のなければ(2004年 鶏インフルエンザ発生)——その事件・事象の起きた年毎に編集された社会詠は、その時代の証言である。現代の血で現代を詠い、社会に訴える、珠玉の361首。(2014. 6. 10刊)



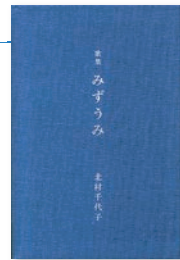
歌集 みずうみ

北村千代子 著

四六判上製本 総104頁 非売品

問合先 彦根市大藪町1834 (著者)

著者喜寿のお祝いの書として娘ら家族が編んだ歌集。「この次に生れ变りても親と子にきつとなろうと子と指きりす」など全108首を収録し、家族らとの思い出の写真をカラーで散りばめた。(2014. 4. 28刊)



伊吹山花散歩



伊吹山花散歩

写真・文／橋本 猛

A4変形並製本 総200頁 2400円＋税

高山植物の宝庫、伊吹山山頂はもちろん山麓や奥伊吹などに咲く希少種を含む花々、春87種、夏89種、秋88種、計264種をオールカラーで紹介。花が楽しめる散歩コースのイラストマップ8点付き。(2014. 3. 15刊)

書店で発売中



水彩で描く湖北の四季

画／馬淵忠夫

A4変形並製本 総46頁 非売品

問合先 長浜市本庄町467 (著者)

県内の高校で数学を教えてきた著者が抱き続けていた「いつか筆をとって絵が掛けたらな」という思い。ようやく作品制作に着手してから6年、退職の記念として水彩画と銅版画38点を収録。(2014. 4. 30刊)



続・秀吉に備えよ!!

羽柴秀吉の中国攻め

長浜市長浜城歴史博物館 編

B5変形並製本 総144頁 1800円＋税

同企画展図録。中国地方（播磨、但馬、因幡、備中）へ侵攻した秀吉軍と迎え撃った武将たちの関連資料を紹介。黒田官兵衛ゆかりの城「御着城」なども取り上げている。

びわ湖・長浜のホトケたち

長浜市長浜城歴史博物館 編

A5判並製本 総136頁 1500円＋税

東京藝術大学大学美術館で開催され、大好評を博した「観音の里の祈りとくらし展」の図録。中世の寺院廃絶後も地域住民によって守られてきた湖北地域の観音菩薩像と暮らしのなかに息づく信仰の形を紹介。



ボク、ゴン太！

父と奥山暮らし 朽木針畑郷より ゴン太通信

写真・文／榊 始

A5変形並製本 総128頁 1500円＋税

ここは琵琶湖の北西部、朽木針畑郷。雪に埋もれる冬は薪ストーブを焚き、春は古木の大ザクラに見とれる。「ボク」こと柴犬のゴン太が山暮らしの日々を綴ったフォトエッセイ。

琵琶湖一周 山辺の道

55万3000歩

岡野忠雄 著

A5判変形並製本 総212頁 1800円＋税

琵琶湖周辺の山辺の道をたどり、12日間、55万3000歩で一周をなしたとげた記録。自然の美しさに魅了され、地酒や郷土料理を味わい、歴史と文学に思いを馳せた紀行エッセイ。



表紙写真

中国江蘇省・太湖の周辺に広がる水郷地帯のナノハナ畑。開花シーズンには観光船も行き交う。（撮影／楊平）

編集後記

今号では、担当学芸員さんに企画展示を解説していただきました。スペースの都合で、琵琶湖周辺の水場や漁具など、言葉による説明はあれども写真はないものがいくつかあります。ぜひ展示で現物をご覧ください。㊥

おわび

前号の表紙写真で、留学生さん3人とも着物の合わせを左右まちがえています。その場にいた日本人みな気づかず、大変失礼いたしました。



淡海文庫 53

織田信長 その虚像と実像

松下 浩 著

B6判並製本 総160頁 1200円＋税

旧秩序の破壊者？ 新しい時代の創造者？ 織田信長がまとうようになった従来のイメージをしりぞけ、史料に残された事績と安土城の発掘成果から明らかとなる“リアリスト”信長。

目標は高く 希望は大きく ヴォーリス先生ご夫妻に育てられて

別冊淡海文庫 21
安藤 清 著

B6判並製本 総152頁 1600円＋税

建築家、実業家として活躍したヴォーリスと教育事業に情熱を注いだ満喜子。夫妻とともに寝食を共にした著者が、近江兄弟社学園の基礎づくり奔走した日々や夫妻の苦悩、人間性などを綴る。



漫画 W. メレル・ヴォーリス伝

隣人愛に生きた生涯

漫画／宮本ユカリ

A5判上製本 総40頁 800円＋税

明治末期、アメリカから英語教師として来日後、同志とともに近江兄弟社を設立。建築設計、医療、教育など多方面にわたる事業を行ったヴォーリスの生涯を漫画で描く。



戦国武将と城

小和田哲男先生古稀記念論集

小和田哲男先生古稀記念論集刊行会 編

B5判並製本 総504頁 8000円＋税

小和田哲男氏の50年にわたる研究と平成26年に古稀を迎えられるのを記念して、戦国史と城郭に関する論考40数本を収録。戦国時代研究者、戦国ファン必携の一冊。



Duetの定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1

サンライズ出版株式会社 Duet 編集部

TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720
(振替) 01080-9-61946

インターネットでDuetがお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先